

車椅子の看護師に①

柳田 美知子

受傷時の思い出

毎年8月5日になると、暑い暑いあの日を思い出す。そして今は何て幸せなんだろう、とそつと手を合わせて祈る。失ったお腹にいた4人目の子も思う。

平成6年夕方、1歳の三女の泣き声を聞きながらバタバタと2階へ洗濯物を取り込みに行き、階段から転落。救急救命センターに運ばれた。それも私が夢を持って発展途上国での医療支援を学ぶために、看護師として奮闘していたセンターで自らが命を助けられた。命は取り留めたが、重度障害者（脊髄損傷）となり一度と歩けない体になってしまった。一瞬の出来事であった。

そして患者としての医療を体験することになったのである。

当時3人の子供は1歳、4歳、7歳であった。平和で平凡な子育て真つ最中の突然の出来事。人生は急変した。半年間ベッドで安静、動くこともできず、考えることはもう子育ては無理だ。夫も入院中に離れていった。

どうしよう。絶望の日々を過ごした。ひとりぼっちで真つ白な天井をぼつと眺めながら過ごした。生きる意味も見失っていた。

幸い半年経ち、脊髄損傷のリハビリテーション病院に転院した。この病院は遠方のため子供たちに会えなくなり、私はますます自分の中でもう存在すら消えそうであった。すっかり母親を諦めかけていた。

骨折して動かなかった左手首も関節形成術（骨を移植する）を受けリハビリが始まった。毎日、作業療法士さん

の手と私の左手が触れる。冷え切っていた心の私だったが、今でもあの温もりは不思議と覚えている。

「お子さんのために給食のナプキンを作りませんか？」と提案され、足は動かないから肘でミシンをかけ、子供の好きなテューリップの刺繍をした。子供の喜ぶ笑顔が浮かんだ。失いかけていた母親の気持ちを取り戻していた。次々手だけで可能なことが増えていく。絶望の中で希望が見えてきた。

そして、やがて私の手は子供たちを再び抱く手となり、育てる手となった。現在は1歳の孫を抱く手でもある。

この入院時の体験は、リハビリテーションが機能回復、残存能力を活かすという一言葉だけでなく、人間の心を救い、役割を感じるものであった。心を動かす意味あるリハビリテーションを学んだ。

同じ障害のある人の支える力

1年後に退院。再び地域で暮らすには課題がいっぱい。母子家庭、重度障害者、バリアだらけの道路・建物・公共交通。自宅も経済難。しかし道なき道を走らねば子育てはできない。まだインターネットや携帯電話も進んでいない時代だから情報もない。

そんな中、私を支えてくれたのは、同じ障害のある先輩たちであった。一足先に脊髄損傷となられ、車椅子生活をされてきている。医療も発達していない、何も便利なものもない、福祉制度も未整備、また地域での障害者理解も不十分な中、暮らしてこられた工夫や健康管理や心のケアなど、そのアドバイスは教科書にはなかった実体験からの大切な宝物のようだった。

「何度諦めから救われたか！やれるかな？つと。またその生きてこられた自信や尊厳ある姿は、たとえ排泄の悩み

を相談しても笑顔で体験談を語ってくださり、私の尊厳を保つには十分だった。

そんな先輩障害者とのつながりが沢山出来て、私の子供との生活再スタートは、不安よりも子供と暮らすための喜びが勝った。「ありがとうございます。お願いします。手伝ってください」と行く先々で助けてもらった。この繋がる場ではいつも笑顔が生まれた。もちろん子供の顔にも無邪気な笑顔が戻った。

子供たちも家族でよく出かけた時、段差や坂があってもみんなで手伝ってくれた。そして学校の授業参観・運動会・卒業式・入学式などに参加できた。雪の積もった時は、雪かきをして車椅子で通れるように道を作ってくれた。今では懐かしい思い出。

車椅子の看護師に

25年はあるという間。子供たちもそれぞれに社会人になった。納税者とし



ひわ湖の外輪船 平成9年6月1日

支えてくれた家族・仲間とともに

て社会人として自立した。

「生産性」という私には悲しい言葉を時々耳にするが、私はヘルパーの支援を受けてきた。私の給料より多く税金を使っている。しかし、私は子供たちに働く姿勢を見せてきた。曲がりなりにも生きる姿を見せてきたと思う。できないことは助けてもらい、また私ならではの看護師の資格を活かして、障害のある当事者の体験も活かし仕事をしている。仕事のために地方から東京に転居してきてからは、いろいろな国のヘルパーが支援してくれた。おかげで子供たちが世界観に触れ、視野も広がったと感じる。

私は2年前まで、地域包括支援センターで看護師として働いていた。高齢者の総合相談の看護師である。がんの末期、一人暮らし、認知症、孤独、うつなど。色々な相談がある。背景もそれぞれ。

しかし、いつも思うのがいくつになってもどんな状況でも役割があり、楽

しみがあることだと思う。絶望・諦めから希望が見えるのは、やはりその方の生きてこられた人生に寄り添うこと。その方の役割を諦めないための工夫や、心を動かすことを一緒に考えることが大切だと思つて仕事をしてきた。

バリアフリーナース®

そして平成29年4月、小さな団体を立ち上げた。子供・障害者・高齢者・外国人の誰もが助け合つてつながり合つて暮らす、やさしいまちを作るための団体「Smile Agaiiro」である。

医療と介護と地域をつなぐためと、命と暮らしを支えるための心ある人材育成をしたいと。小中学校でも子供たちの車椅子体験学習に協力して、体験談を伝え、子供たちの心に呼びかけている。助け合う心と勇気を伝えている。子供たちのキラキラする目と、今日から勇気を出しますと言う声を聞き、私

はまだまだ社会に役に立ってる存在でいたいと思う今日この頃。そして同時に困つたら助けてと言つてよい社会も大切だと加える。

医療だけでは救われない心と生活の部分、一足先に体は不自由になった私から、誰もが高齢になり不自由になるのだから、不自由でも暮らすことのできる社会に微力でも役立ちたい。また私の先輩(同じ障害のある)たちが、高齢になつても加齢による病気と共に、認知症と共に、不自由と共に、暮らし続けられている姿がまた師でもある。誰もがいつまでも大切な存在である。看護師の視点からいうと、介護予防とか認知症予防という予防だけでなく、必要な介護を受けながら、認知症があつても人権が守られ、その人らしさが保てるための循環社会を思う。

(一般社団法人Smile Agaiiro代表理事
バリアフリーナース®)

車椅子の看護師に②

榎田 美知子

西アフリカへ

一昨年、長年の夢であった西アフリカのガーナまで独りで出かけた。

受傷23年後、60歳。首都・アクラのコレブ地区にある「野口英世」の研究室にたどり着いた時、いろいろな思いが込み上げてきた。この地で黄熱病の研究に生涯をささげた野口英世。彼の研究室や記念碑からは「忍耐」という文字がいくつも目に飛び込んできた。

看護師として、アフリカ医療支援を夢見た20歳台後半を思い出しながら、彼の生きさまに今だからこそ思いを馳せることができた。そして自分の足で



野口英世像と筆者
(ガーナ・アクラ)

(車椅子が足) 来たことも、言葉にできないほど感慨深いことであった。もちろん車椅子だから道中はいろいろなサポートを受けながらである。本当に車椅子生活になってからの方が、人とのふれあいが出来、交流が生まれ、勇気やチャレンジ精神が培われたような気がする。

心のバリアフリー

ガーナに住む友人達も皆笑顔で手伝ってくれた。水道もない、電気も限ら

れている、道路もホコホコの貧しい村で過ごしたが、この心地よさは一体何なんだろう、と不思議な体験だった。

近所の皆さんが集まってきては私を歓迎してハグし、そして一緒に大鍋で食事を作る。皆におすそ分けをする。何か懐かしい子供の頃の風景と重なった。

西アフリカに行く前は、アメリカに数回行ったことがあった。アメリカでは、車椅子対応の試着室、ホテルの客室、スロープや建物・公共交通などバリアフリーの整備に驚いた。キャンプ地でも車椅子ユーザーのためのテントもあった。手動装置付きレンタカーもあった。ハード面の整備がスムーズで心地よかった。

しかし、不便な西アフリカの地域で、これらのハード面ではない心地よさは、「心のバリアフリー」だと後に悟った。

60歳からの青春へ

今年も、4月にナイジェリアに行った。首都アブジャにある孤児院を現地の知り合いの医師と、昨年結婚した夫と訪問してきた。親をエイズや病気で亡くした子供たちが多い。この子供たちと触れ合って新たな思いを抱いた。



ナイジェリア・アブジャの孤児院を訪問



8月28日、30日に、第7回アフリカ開発会議(TICAD7)が横浜で開催された。遠くのアフリカが再び身近に感じられ、多くの学びと刺激を受けた。

そして、TICADのパートナー事業のファクションショーに、私達は夫婦で参加することとなった。気がついたらモデルで車椅子は私だけ。私のグループはアフリカンファクションであった。

実際、私はアフリカに行き、アフリカの生活の場に身を置き、人々とふれあい、アフリカンファクションを見て、着て、肌で感じて好きになった経緯があった。そして何と言っても車椅子でも動きやすいデザインだと気付いた。明るく元気な色や柄が多い。障がいがある方がなかるうが、普通のデザインの中に、障がいがあっても大丈夫なデザインがあった。

まさしくインクルージョン&ダイバーシティ。もちろん社会もそうであってほしい。そして、

「自分らしくていいんだよ」と言いたい。それは過去の自分に向けても。

いろいろな意味を秘めながら、繋がる手ごたえを感じながら楽しんだファクションショーであった。

私にとっては、60歳からが第2の青春。野口英世のように恐れることなく、夢に向かって生きていきたい。

(一般社団法人S3ie Agent代表理事
野口英世バリアフリーナース)



TICAD7での
ファクションショー

リハビリテーション

防災への備え②



2019 10

NO. 617

リハビリテーション

防災への備え①



2019 8・9

NO. 616